虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です。

虹の架橋

第２９２号
令和元年12月1日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
川﨑まち子さん
（みどり市大間々町）

ＮＰＯ法人ながめ黒子の会の世話人。ながめ余興場を愛するお客様たちから最も愛されているマドンナ。さりげない優しさや心遣いがまち子さんの魅力です。

つつじヶ丘チャリティー落語会
十二月八日・立川談四楼独演会

今年も「ながめ余興場」で、つつじヶ丘チャリティ落語会が開催されます。出演は、立川談四楼、西亮一（マジック）、立川だん子、立川縄四楼のみなさんです。

立川談四楼さんは群馬県邑楽町出身。立川談志さんに入門し、立川流落語会第一期真打となりました。小説やエッセーなど、著作数も三十冊を超えています。『シャレのち曇り』という小説には、師匠の立川談志さんが落語協会を脱退して立川流という団体をつくった経緯や落語界の裏話など、興味深い話が面白く綴られています。

主催者の「つつじヶ丘手をつなぐ友の会」は、知的障害児、者のための「つつじヶ丘福祉施設」を支援する団体で、毎年チャリティイベントを開催しています。

十二月八日、午後二時開演。木戸銭は二千円。社会福祉法人広済会事務局のほか、足利屋、アスク、小屋設計、シイナ、井筒屋支店でもお求めいただけます。

上州寄席inながめ

十二月四日（水）午後二時からながめ余興場で上州寄席が開催されます。出演は、ぴろき、東京ボーイズ、宮田陽、昇。

林家たけ平・三遊亭萬橘二人会

十二月十五日（日）午後二時からながめ余興場で「たけ平・萬橘二人会」を開催。木戸銭は、二千円です。

小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）《292》

恩頼（みたまのふゆ）

数年前から交流を続けている長崎県の寺井一郎先生は徳塾「修身館」を主宰され、未来を担う子どもたちや私たちに、正しい日本の歴史や文化を教えてくれています。

寺井先生の著書「恩頼」（みたまのふゆ）を読むと、日本人としての誇りが蘇ってきます。

「恩頼」とは、日本書紀に出てくる言葉で「神様や天皇陛下の御恩、恩徳のおかげ」という意味で、深い感謝の念が込められた素敵な言葉です。

「天皇のお仕事の中心は、天照大神を祀る「賢所」、歴代天皇を祀る「皇霊殿」と、日本中の神々を祀る「神殿」の宮中三殿に日本国民を代表して、朝な夕な国家の安泰と国民の幸福を祈る最高の神官なのです」と「恩頼」に書かれています。そして、三年前、天皇陛下が仰せられたお言葉が掲載されていました。

『私が天皇の位についてからほぼ二十八年、この間私は、我が国における多くの喜びの時、また悲しみの時を人々と共に過ごして来ました。私はこれまで天皇の務めとして、何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えてきましたが、同時に事にあたっては、時として人々の傍らに立ち、その声に耳を傾け、想いに寄り添うことも大切なことと考えてきました』

今年四月三十日の「退位礼正殿の儀」、五月一日の「即位後朝見の儀」、十月二十二日の「即位礼正殿の儀」、十一月十四日～十五日の「大嘗祭」などの行事を通して、私たちは改めて日本の歴史を学ぶ機会が与えられました。

第百二十六代の天皇陛下に即位された徳仁陛下が皇太子殿下時代に世界各地でご講演をされた内容をまとめた『水運史から世界の水へ』という本を読むと、水の恵み、水災害の歴史、世界の水問題の現状と課題を研究されてきた徳仁陛下だからこそ、被災地や被災者への思いを深くされているのだと思いました。

「被災地の復興には時間がかかると思います。私も、雅子と共に、被災された方々と被災地にこれからも心を寄せ、その復興を見守っていきたいと思っております」というお言葉の中にも、深い祈りの御心が伝わってきました。

寺井一郎先生の一首です。

御一代一度の重儀大嘗祭
神饌捧げ神生りませる

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の絵手紙《292》

大野勝彦さん『本当の味』

毎月、いろいろな方から季節感に溢れた絵手紙をいただきます。額に入れて店に飾ったり、ファイルして時折見直したりしています。

熊本の義手の詩画家・大野勝彦さんから頂いた絵手紙も宝物の一つです。五十円切手が貼ってあるのでもうずいぶん前にいただいた絵手紙ですが、宛名面も筆文字で書かれており、「私も元気でやっています」という最後の一行を読むたびにいつも元気をいただいています。

元気が出る、大野勝彦さんの２０２０カレンダーは足利屋でもお求め頂けます。千五百円。

靖ちゃん日記

令和元年十一月十八日（月）

縁あって、大間々駅のトイレ掃除仲間六人で、長岡市立中之島中央小学校を訪問。七時出発、十時に学校に到着。三時限目、体育館で三年から六年までの児童に「トイレ磨きは心磨き」という話をした。四時限目は六年生の男女四十五名が五グループに分かれてトイレ磨きに挑戦した。慣れた手つきで便器を磨く大人たちの姿を見た子供たちは、除菌クリームを塗り、ゴム手袋をはめた手で、恐る恐る便器に手を入れた。便器がピカピカになりはじめると、みんなが夢中になり、「トイレ磨きは心磨き」であることを体感した。「やってよかった」、「家でもやりたい」という子供たちの素直な感想を聞いた金子明子校長先生の目に涙が光っていた。

今日は往復で三七〇キロ走ったが、疲れは残らず感動が残った。途中何度もトイレ休憩、トイレに感謝の一日だった。長岡は遠かったが、年のせいかトイレは近かった。

秋麗や術後の妻の手をとりて

目の手術を終えたばかりの愛妻の手をとって病院の出口から駐車場までのわずかな距離を歩きました。秋の麗らかな日差しも手術を終えたばかりの目には眩しすぎるようにも見えました。

結婚して四十年目の秋、「あれから四十年」という綾小路きみまろの言葉を思い出して笑ってしまいました。そういえば、結婚以来、一度も手をつないで歩いたことなどなかったように思います。

春夏秋冬、今人生の秋を迎え、介護で手をつなぐ日も近いのかもしれません。やっと健康のありがたみがわかる年代になりました。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん

虹の架橋 ⇧ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第二百九十三号は一月一日（水）発行予定です。